



Title	取得困難？イメージ世界へのパスポート
Author(s)	辻, 牧子
Citation	臨床哲学のメチエ. 2004, 13, p. 6-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71166
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



特集 I 「紅」をさす
ギャラリートーク

取得困難?
イメージ世界への
パスポート

辻 枝子

絵画のみならずアートを見ることはしばしば「旅」に例えられる。どちらも日常とは異なる時間を体験できる空間だからだろう。だが、大層な荷物とともに移動しなくては楽しさが獲得できない実際の旅に対して、アートではほんの少しの楽しもうとする姿勢と想像力で、どこへでも飛び立てるパスポートが手に入る。ところで実際の「旅」の仕方はこの十年で大きく変化したと云われている。こ

れまでは旅行代理店がお贈立するバック方式のツアーが出発前の面倒な手続きがいらす現地では見どころを効率的よく押さえられるということでも人気があった。しかし現在はまだまだバックツアーが主流とは言え、航空券や宿泊の手配やプランも自分で立てる個人旅行者が増えてきている。ガイドが案内するお決まりの観光スポットを見せられるのではなく、まるで自分も見知らぬ街の一住人になったかのような気分で見学を採り当てたいというのが、今の気分なのだろう。旅の楽しみの対象が、スベクタクル的なものから人の息遣いが感じられるようなリアルな時間の体験へと変化しているのだ。「人」と交わることがもつとも「現実」を体得した気分を味わえる異質な時間となったのかもかもしれない。

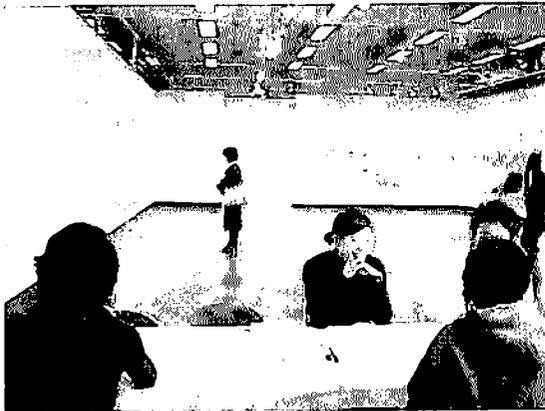
さて「旅」においては個人化が進む今日であるが、アートの鑑賞法にいたっては「ギャラリーツアー」や「鑑賞会」といったバック型がよくやく定着しつつあるといったところだ。学芸員やアートボランティアがツアーコンダクターさながらに、作品の説明をしている光景をよく眼にする。これまで、アートの鑑賞は一部の人の楽しみであり、何か息のつまるお勉強だと捉えられてきた。このイメージの弊害に気付いた美術館やギャラ

リーがさまざまにアートの楽しみを広げる取り組みをはじめているからだ。

「紅をさす」野村嘉代、おのさやか二人展」の関連企画として、臨床哲学研究室（以下臨哲）さん、after school（以下asa）さんともに行ったギャラリートークもその取り組みの一端に位置するといえる。ただ本企画では、両作家の作品を解説する通常のトークではなく、「対話」を試みたかった。なぜならバック型の取り組みの多くが広範な人を対象とし、それゆえに対多数の学校の授業のような形態をとらざるを得ないことへの疑問をずっと抱いていたからだ。バック型の場合、主催側は明確なお得感を参加者に渡そうと知識の伝達で、アートの楽しみ方を伝えたような状態になることも少なくない。そして鑑賞者の側も「知識」ある意見を聞くことによって、講演を聞く直前まで自分が抱いていた感想をすっかり忘れたかのようになってしまうことまあるように感じていた。それは、手にいれかけた想像力のパスポートを放棄してしまう行為なのではないだろうか、などと叫びはしないが、トークの仕方によっては、作品を通じて創出される作り手、受け手の関係間におかしな溝をつくることもあるのかもしれないと思いついてきた。今回の試みは、だから臨哲の対話の方法を手がかりに、作家と鑑賞者と作品の有機的なつながりを探ってみることにあつた。

トークは参加者同士の発言によってつくられる対話形式の第一部と、その対話を聞いて得た感想を野村、おのと私が話す第二部によって構成した。第一部は、臨哲さんが通常カフェ&トークで行われているソクラテック・ダイアログ（以下SD）形式の対話型トークを応用し、ファシリテーター役も臨哲さんにお願ひした。両作家の作品からトークの対象となるものを各ひとつずつ作家同士が選定し、それぞれに一人のファシリテーターと十名程度の参加者が絵を囲むように座つた。

SDでは、通常作品を見る経験の共有を重視し、ただ素材に作品をみた印象を具体的な言葉に代えていく作業から始まる。そして意見がおおむね洗い出されると、今度はそこから抽象的な観念を探るような「問い」をたてる作業を行う。おそらくSDではどのように参加者同士が「問い」をたてるかが、もつとも難しく重要な作業なのだと思う。しかし今回はあえてその「問い」をたてる部分は行わないことにした。トークの為に用意できる時間が限られており、駆け足に進行するのをさけるためであったが、結果的には作家に鑑賞者の「一生」の声を聞いてもらう時間を多くとることに繋がつたと思う。そしてそれが、本企画で私が両作家に体験して欲しかったことなのだ。



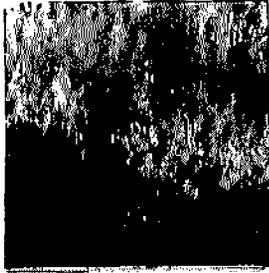
当然のことながら展覧会や作品に思い入れがあればあるほど主催する側、特に作家は緊張する。だからそうそうお客に対して市なうてかけられるものではない。それに、日本の美術作家の多くが教育を受ける芸術系大学では、作り手志望の学生がアートに対して余り面識のない方とのコミュニケーションはまだ少ないこともある。つまり作家は、全くアートの興味のない人と作品について話しをする機会に恵まれていないと言える。その一方で、昨今の「説

明責任)ブームは作家が作品を説明することがアートの社会性に直結するかの様に語られる。社会に少しでも関わり、そこに個人の表現を投げ出していこうと考えるこれからの作家の一人として野村とおのことがつづやいた一言はおそらくそんな背景があるのだと思う。本企画の発端ともなったその一言とは「作品について説明すればするほど、作品で表したかったことが逃げていってしまう気がする」というものであった。

では、鑑賞者にどのようなことばで説明をすることが作家にとってもベターなのだろうか。そのヒントはアートの専門用語が通じる者同士の中にはないはずで、「敵を知れ」というわけではないがまずは鑑賞者が使うことばを聞き、作品をみる視点を知ることから始めることもひとつの方法だろう。そこにおいて必要なのは、ガイドではなくファシリテーターだ。鑑賞者の意見を導き出し、グルーピングして道をつけつつまた迷走へと誘うスキルを臨哲さんに貸してはしなかった。今回臨哲さんに期待していたのは、鑑賞者が手にしたパスポートを存分に活用して何を語るのかを作家がじっくりと聞く場を設えてくれることであった。そして、実際そうしてくれたように思う。

トークは二グループでそれぞれの様子を見せ、「多様な意見」ということばでくくるのがもったいないほどだった。

ほんの一部を紹介すると、野村グループでは作品はタイトル「Under her skin」からの発想が大方だったのが、赤色に注目する意見から色や筆跡に興味があった。座る位置によって見え方がかなり異なったように体勢をいろいろ変え出した人もい



GTのテーマになった、野村嘉代「under her skin」47ページにカラーで掲載しています。

た。画面が揺れて見え、風の存在や時間を見る人いた。

おののグループでは、画面を占める老女にまず視線が集中した。大枠でおおあちゃんと名指されていたものが、老女が「いろっほい」と感じた人の意見から、首の傾け方などのディテールに視線がうつり、老女がほとんど分解されていった。

トーク中はなかなかルールに馴染めない人もいて、さまざま不協和音も生じていた。しかし鑑賞する視線は縦横無尽で、他者の意見にとっても敏感に反応していた。他の参加者と概ね同じこと言う時でも、ことばの調子やちよつとした言い回しの違いにこだわりが出てきていた。その様子は、鑑賞者が対話を通して受け手という受動体から作品をまなびず運動体へと変化していく瞬間に私には見えた。旅の例えにもどせば、楽しみ処を全て教えてくれるガイドではなかったので、やむなく自分たちで現地の人に道を聞くうちに思いもかけない素敵な風景に出会うような楽しみを少しだけ共有できたのではないか。

一方、第二部の両作家による感想トークは、第一部のトークにあった摩擦感を上手に引き継ぐことは難しかった。司会であった私が、話に絡ませる対象をよくばりすぎ散漫な印象を与えてしまったからだ。もつとトークで生まれていた「問い」のきざしにつっこめればよかったのだろう。だが、



同じくGTのテーマになった、おのさやか「うつつ(と)うつつでない夢」2ページにカラーで掲載しています。

両作家は自分の作品が全く知らないものになっていくような体験をとめても前向きに捉えていってくれたと思う。改めて作家と鑑賞者は違う視点があると感じたことを参加者に丁寧に話していた。このトーク全体が対話であつたと言えるならば、それは違ひの輪郭をそれぞれが受け止め、互いの意見に耳をすます姿勢になつたことだと思ふ。もちろん、本企画のみで無限の変数をもつコミュニケーションの方式に解答を与えることはできない。それに、言語・非言語表現がはらむ差異はとても深遠だ。だが、それをともに考えてみようかと誘える相手がいることが分ければ、面倒な手続きの多い個人旅行にだつてでかけやすくなるのではないだろうか。

ところで、当日は朝からa5aさんが会場内にカフェを設置した。飲み食いしながら、スタッフや作家、鑑賞者同士で話をしやすい場所を用意してくれたのである。本展にちなんだお菓子も用意するなど、これまでさまざまな人とともにアートの楽しみを増強させる試みを行つてきた経験をいかした演出だ。ギャラリーという空間でも話を楽しんで構わないことを観客にごく自然な振る舞いでデモンストレーションしてくれた。a5aさんと臨哲さんに共通するのは「一人への配慮」なのだ。私は確信している。

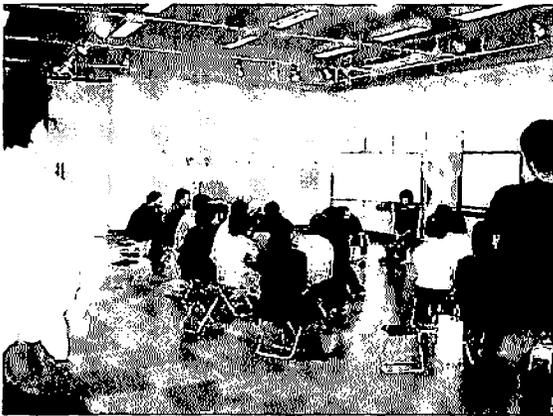
また、a5aのメンバーはトークをもっとも楽しんでくれた参加者でもあつた。メンバーの一人がトークの感想メールを送つてくれた。日常では気付かないような他者の意見と自分の意見がクロスオーバーする不思議な感覚について記されていたのだが、それは「対話」のまつただ中にいた者だけが感じ得たことだと思ふ。

複雑な構成となつた今回の対話はもしかすると「生」の声というような、生活と地続きのものではないかもしれない。だが彼の意見はトークの設えが仮設的な人間関係の構築や擬似的体験であつたとしてもそれらがつつたの嘘つばちのとはいえないことを教えてくれた。休暇で旅行を終えた人がリフレッシュして仕事にもどるように、このトークを終えた人々

が家路につく過程で現実と言われる世界に戻つた時、心の片隅で何かしらの微少な変化が起つたとしたら、それは毎日の生活を変える小さな力になるかもしれないのだ。

私自身も今回のトークを契機に心に引つ掛かり続けていることがたくさんある。ひとつには、やはりどうしてもギャラリーでの試みでは、トークに来てくれる人はすでにアートに何かしらの関心をもっていることが多いことだ。つまり、こちらが出向くわけではない以上（時には出向いても）、自分は全くアートとなんか縁がないと思つている人に参加してもらう困難さに改めて気付いた。お

そらく、そういう方にアプローチしたいと考えるのはとんでもなくおせっかいなのだろうが、それでも私がアートの楽しみを伝えたい方はなぜかこういった方々なのだ。確信させられた。それぞれの人の豊かな人生経験に裏打ちされたアートの見方への興味があくらみつづけている。この方々に振り向いてもらう作戦を一緒に考えてくれる人はたくさんいることがトークを通して見えたように思ふ。



そして、本企画を経験した両作家が今後どのように制作を続け、鑑賞者のまなざしと向き合っていくのかも気になるところである。野村は四月に個展を終えたばかりであり、アルバイトの傍ら制作に励んでいる。おのほ博士課程に進み、秋には個展の誘いがあるという。次のステップに進み出した彼女達の活動を読者のまなざしにもぜひ一瞥いただければと思う。もしかすると、トークが彼女達にもたらしたかもしれない密かな変化に出会っていたのかも知れない。

最後になったが、長い準備期間をともにしてください、本企画のために最大限の努力を払ってくれた盛哲さん、a5aのみなさまに心からお礼を述べたい。ありがとうございました。

※本展レビニューが松下電機により運営されていた美術サイト TOWN ART GALLERY に掲載されています。御参照ください。http://www.hi-home.jp/gallery/art/101/04.html

つじまき)「紅をさす」野村嘉代・おのさやか二人展」
企画運営担当

立命館大学政策科学部、京都造形芸術大学大学院卒業。現在は株式会社フライングネットワークに勤務神戸アートビレッジセンター1階のコミュニティースペース「Room」企画運営担当。学生時代よりアートの見方、アートとの繋がり方はもっとバリエーション豊かになるのではとの思い込みにとりつかれ、WSや展覧会の企画運営を行う。Roomでは臨哲メンバーさんと継続的な勉強会を開催計画中

※その他 Room 情報を知りたい方は info@roomまでタイトル「情報希望」本文「お名前、御住所、電話番号」を書いてお送りください。折り返しご連絡差し上げます。